

川端康成と綴方——戦時中の帝国主義とつながる回路

魏晨

はじめに——なぜ戦時中なのか、なぜ綴方なのか

綴方は明治30年代、言葉を習得するために登場した教育法である。大正時代に入ると、自由教育運動が行われる流れの中で、童心主義が提唱されるようになり、文芸の場でも『赤い鳥』が創刊され、鈴木三重吉らが芸術的童話、児童自由画を提唱すると共に、地方の教師が担い手となって「生活綴方運動」が行われた。これらの活動は大正デモクラシーとともに盛んになったが、昭和に入って、鈴木三重吉の死やプロレタリア文学への弾圧を経てだんだん衰えてきた。しかし、昭和14年以降、全盛期に綴方活動を行っていなかった川端康成はかえって綴方に興味を示しはじめた。

昭和14年、川端は島崎藤村、森田たまと共に中央公論社に招かれ『模範綴方全集』（中央公論社 昭14・6）を編集し、選者としてのコメントは「綴方について」（『文章』東峰書房 昭17・7）にまとめられた。また、東京女子大学で綴方選者に携わる経験について講演を行い、その講演内容は「綴方の話」（『文学界』文化公論社 昭14・8）として発表された。太平洋戦争勃発後の昭和17年、川端は満洲・支那旅行を経て〈外地〉関係の綴方に注目しはじめ、満洲の五族児童によって書かれた生活記『満洲国の私たち』（中央公論社 昭17・12）の編集者を務めた。その綴方に対する熱意は序文から伝わってくる。川端の綴方経験は彼の作品にも反映されている。昭和16年9月から翌年に渡って、『少女の友』に連載している「美しい旅」（『少女の友』昭14・7-昭16・4、昭16・9-昭17・10）は、日本にいる「盲で、聾で、唾の幼女」¹をめぐるメインストーリーから大幅に離れ、渡満した盲学校の月岡先生の満洲見聞記に変わり、さらに途中から満洲の子供が書いた綴方及び満洲における日本語作文教育の話に行き着いた。

少し遡って昭和12年7月7日、盧溝橋事件をきっかけに、日中戦争が勃発した。同年9月「国民精神総動員運動」²がはじまり、翌年には「国家総動員法」が実施された。日本のあらゆる分野のりびとがさまざまな形で動員された。勿論戦争情勢が深刻化するに伴い、国民精神総動員運動は文学界にも大きな影響を及ぼしていった。その代表としては、ペン部隊や日本文学報国会の活動があげられる。

戦後になって、川端はその時代の自分を振りかえり、「私は戦争からあまり影響も被害も受けなかつた方の日本人である」³という言葉を残している。川端と戦争との関係を論じる先行研究³は主に川端の文芸作品を考察し、川端が戦争に対して協力するにしても抵抗するにしても消極的な姿勢を見せ、戦前戦後を一貫して日本的なものを追求したと結論を下した。しかし、川端と戦争との関係について考える時、川端の戦時中の重要な仕事であった綴方をめぐる活動にこそ重点を置かなければならない⁴。彼は昭和14年という時点で、潮流がすでに収束してしまった綴方に目を向け、日本国内のみならず、植民地支配下の満洲においても活動を積極的に行っていたのである。

1 川端康成の随筆「旅中片憶」（『文学界』文化公論社 昭15・7）より引用した。この表現を用いたのは、原文を忠実に記載するためであり、差別的な意図を含めているわけではない。

2 「あとがき・独影自命」『川端康成全集』（16巻版）新潮社 昭23

3 主な先行研究には羽鳥徹哉の「川端康成と戦争」（『国文学解釈と鑑賞』至文堂 昭56・4）、山中正樹の「十五年戦争」と作家「川端康成」——昭和十年代の「作品」を中心に——（『桜花学園大学人文学部研究紀要』桜花学園大学 平17・3）がある。具体的な文芸作品を取り上げる作品論には小林芳人の「牧歌」論（『川端康成研究叢書5』教育出版センター昭54・3）や田中実の「戦争」と川端文学（上）——〈日本的超越〉のなかの『ざくろ』（『国語通信』平3・6）、「戦争」と川端文学（下）——〈自然〉という〈他者〉・『雪国』（『国語通信』平3・8）があげられる。

4 川端と綴方を考察する論は田村嘉勝の「川端康成と綴方——豊田正子の場合」（『言文』昭58・12）がある。川端の豊田正子への関心に注目し、川端の文学観の枠組みに論を立て、川端の綴方に対する関心は「文学のリアリティを求める」ためなのだとして結論を下した。田村は川端の綴方選評や少女雑誌で行われた選者活動と関連させて考察しておらず、戦争との関係も取り入れていない。その他、三浦卓は「少女の友」のコミュニティーと川端康成「美しい旅」——〈障害者〉から〈満洲〉へ（『日本近代文学』平21・5）において綴方関連の作品「美しい旅」を考察し、川端が戦時体制を補完する可能性を提示しているが、綴方に重点を置いておらず、しかも作家像の批評に留まっている。

本論は川端の綴方活動に焦点を合わせ、彼の戦争との関係を問い直す。彼の綴方活動から窺われる帝国主義との接近、そして帝国主義との乖離について考察し、川端が戦時中において積極的に綴方に取り組む理由を解明することにより、川端と戦争との関係を再考する。また、本論は川端に関する作家論的研究であるが、もう一つの大きな問題意識も念頭に置きたい。つまり、一人の作家がどの面において、帝国主義に回収され、いかに戦時中のイデオロギーに接近したのか、その思考の回路とは何なのか、を追跡することを通じて、一人の知識人が帝国主義に巻き込まれる過程と特徴を解明できればと思っている。

一、綴方と帝国の夢

川端が関わった綴方活動はすべて日中戦争勃発後に行われたものであり、戦時中という時代性が強く現れている。この節において、それらの活動で見られる帝国主義的側面について考察してみたい。

川端の最初の綴方に関する仕事は昭和14年の『模範綴方全集』の編集である。『模範綴方全集』は川端康成、島崎藤村と森田たまたが編集した綴方作品集であり、小学校一年生から六年生を六冊に分けて編集が行われた。選者を務めた川端は学年ごとに選者の言葉を加えた。この編集経験は川端に強い印象を残し、同年の8月、東京女子大学において『模範綴方全集』編集経験に基づいて講演を行った。選者の言葉やその講演から時代性を読み取ってみよう。

選者の言葉をまとめる「綴方について」の冒頭部分には以下のように書いてある。

その応募総数は約二万六千に達し、内地各府県はむろんのこと、台湾、樺太、朝鮮、満洲国から、遠く南洋やアメリカまで、日本語の小学校のある土地は、あまねく漏らすところがなかつた。まことに現在の偉観と言ふべきであらう。また、癩療養所や盲聾の学校からも、作品を寄せられた。選者はいよいよ、この模範綴方全集の企てが、国家的、民族的な、一大事業であるといふ感を強くし、これに携はる責任を思つた。（「綴方について」『文章』東峰書房 昭17・7⁵）

川端は単にその応募総数の多さだけではなく、応募地域の広範さにも驚いていた。「台湾、樺太、朝鮮、満洲国から、遠く南洋やアメリカまで」という日本国内を越えた広域に「日本語の小学校」があるという事実を受け止め、日本人あるいは日本語の拡張に「まことに現在の偉観」を見出して感嘆した。さらに、「癩療養所」にいるハンセン病患者や「盲聾の学校」にいる学童も綴方の選抜範囲に含まれている。川端は〈内地〉と〈外地〉そしてマイノリティもその国家民族の事業に入っていることについて「国家的、民族的な、一大事業」と激賞した。

彼のこのような考えは昭和12年9月から始まった「国民精神総動員運動」及び13年に実施された「国家総動員法」と強い関連性が窺われる。「国民精神総動員運動」では、「八紘一宇」という全世界を一家とし、天皇をその家長とする考えが宣伝されると共に、

5

本稿に引用された川端康成の言説は全て『川端康成全集』(35巻版 新潮社 昭55～昭59)によるものである。引用の後ろの()に初出を表記する。巻数及び引用箇所は省略する。また旧字はすべて新字に改めた。

「挙国一致」「堅忍持久」などのスローガンがかかげられた。国民は消費節約・貯蓄奨励・勤労奉仕・生活改善を要請され、物質生活と精神生活の重心を戦争協力に傾斜させた。台湾、朝鮮といった植民地との関係を強化する課題も迫っていた。その一環として、日中戦争の勃発から、「満洲国」との連携がより重視されるようになった。日中戦争開始後、国民精神総動員運動および国家総動員法の実施に伴って、「高度国防国家」建設のための戦時教育改革が進められ、障がい者教育も「聖戦」遂行のための「人的資源の確保」の手段とされていった。日本国内外や障がい者などを視野に入れ、「国家的、民族的な、一大事業」をやり遂げる野望は、昭和12年以降推進された「国民精神総動員運動」と重なっており呼応している。

昭和16年、太平洋戦争が勃発し、「大東亜共栄圏」の思想が浮上した。この時期、川端の創作活動は活発ではなかったが、三回ほど満洲に渡り、囲碁観戦、講演、創作のための踏査などを行った⁶。しかも、綴方に関する活動にも積極的に関わっていた。『満洲国の私たち』の選者を務めたのは重要な仕事のひとつである。この本は「満洲国」の五族学童が書いた優秀な生活記をまとめたものであり、満洲人、日本人、朝鮮人、蒙古人、ロシア人の五族協和を謳う政治性があふれる企画であるが、川端は日本語作品の選者を務め、この仕事を高く評価している。

この書は、ひとり日本人にとどまらず、大東亜の諸民族にも広く読ませたいと、おのづから考へ進むところにも、今日の日本がある。さうして、日本と戦ひつつある敵国もまた、この書を尊敬しなければならぬ日は、やがて来るであらう。
（『満洲国の私たち』 中央公論社 昭17・12）

綴方の読者は日本人だけではなく、「大東亜の諸民族」にも及び、さらに「日本と戦ひつつある敵国」の人まで想定されている。綴方は日本が世界に尊敬される誇らしい企図として考えられていた。それは、読者を「日本」、日本がリードする「大東亜」と「日本と戦ひつつある敵国」の三部分に分けた点で、「大東亜共栄圏」思想に定められた世界認識と同じ立場に立つものである。綴方が影響を及ぼしていく経路は太平洋戦争中の帝国拡張の足音と響き合っている。

さらに、同じ『満洲国の私たち』では、「満洲国」における綴方教育の意義を強調している。

新しい国の満洲で、特に戦時の今、青少年の精神と生活との重要さは、それがここに記録されたと言ふだけでも、おろそかには読めぬが、この年齢の純真、誠実、明快には、この年齢独自の表現が伴つてゐることも、見落としてはならない。つまり、日本の綴方の恩恵である。

日本の綴方の進歩は、世界に誇るべき文化的成果として、すでに知られてゐる。それが海を渡つて、満洲国でも、日系児童の綴方が生育してゐることに、私はかねてから感動があつた。（『満洲国の私たち』 中央公論社 昭17・12）

川端は日本の綴方を「世界に誇るべき文化的成果」と褒めあげている。そして、この

6 川端の満洲旅行について、奥出健の「川端康成——戦時下満洲の旅をめぐって」（『國學院雑誌』 國學院大學総合企画部 平16・11）が詳細な考察を行っている。

「世界に誇るべき文化的成果」が世界で活躍していくことを望むのである。綴方と世界で活躍すべき日本文化を結びつける考えには、その時代の潮流を感じずにはいられない。

7
中国語のこと。一般的に満語とは満洲族の言葉を指しているが、当時「満洲国」の正当性を主張するため、中国語を満語に改称した。

8
石剛『植民地支配と日本語——台湾、満洲国、大陸占領地における言語政策』三元社 平15

9
注8と同じ。

10
山口守『「帝国」日本の学知 第5巻——東アジアの文学・言語空間』藤井省三編集 岩波書店 平18

11
田中寛「東亜新秩序」と「日本語の大陸進出」——宣撫工作としての日本語教育』『植民地教育史研究年報』平12

12
注11と同じ。

その時代潮流を考察するために、植民地支配下の「満洲国」に目を向けてみよう。昭和7年3月1日、「複合民族国家」を標榜する「満洲国」の建国が宣告された。その「複合民族国家」にあわせて満洲の言語政策は満語を国語にし、満語、モンゴル語、日本語、ロシア語を公用語とした。建国初期、国語は満語⁷だけであったが、昭和12年5月から、勅令で「学事通則」「国民学校令」などの学校規程が公布されたうえで、昭和13年1月1日から日本語を「満洲国」の国語とする「新学制」が開始された。「この新学制により、日本語がはじめて明確に「満洲国」の「国語」と規定されたのである」⁸。新学制が実施された結果、日本語の時間は「小学校の一年から設けられ、しかも、「国民科」の時間のほとんど半分を占めるようになった」⁹。山口守は「植民地・占領地の日本語文学——台湾・満州・中国の二重言語作家」¹⁰において「満州での日本語が、植民地台湾や朝鮮におけるような唯一の国語でなく、序列上の第一国語であったという点は、日本語強制力の変容ではなく、大東亜共栄圏を想定した「東亜共通語」として日本語が出現するプロトタイプが満洲国で形成されたことを意味している」と指摘する。昭和14年6月20日から三日間にわたって第一回国語対策協議会が開催され、「日本語教育に関する方策」が検討された。その中に最初に挙げられたのは日本語と日本文化との関係性である——つまり、「日本語を通して日本文化・日本精神の優秀性を覚らしめると共に、日本の事情・日本の理想を知らしめ、かつ我が国民と提携協力する気風を馴致するのを眼玉とすべきこと」¹¹である。植民地の日本語教育は、日本文化を植民地の被支配者に押し付けることにより、植民地拡張に重要な役割を果たしたものである。ゆえに、植民地支配と共犯関係を持ったのだ。まさに「東亜新秩序」の建設の基礎が、「日本文化」の健全なる進出にあり、その壮大な実験場として「日本語の大陸進出」に期待が寄せられた¹²という状況であった。

川端は、「満洲国」で展開された綴方教育を戦時中の「青少年の精神と生活」を正す手段とし、綴方を「世界に誇るべき文化的成果」として見なす。これは植民地の日本語教育が「日本文化」「日本精神」を発揚する有効な手段とされる戦時思想と同じものである。

以上の考察から、川端の綴方活動は戦時中という時代から離れることができなかつたことは明らかである。彼の綴方に関する言説から「国民精神総動員運動」や「日本語の大陸進出」といった帝国の文化政策に同調している点が多々見出される。彼は綴方を通して戦争とつながっており、帝国日本の戦争拡張と歩調を合わせていたことが窺われる。

二、帝国からの乖離

前節では、川端の帝国主義と呼応する言説を検討し、彼が綴方を通して戦争とつながっていたことを明らかにした。しかし、川端は帝国日本が規定した綴方の意義と異なる価値観を持っていた。この一節で、その異なる価値観について論究する。

満洲での日本語教育及び児童文化といえ、石森延男が必ずと言っていいほど注目されているが、石森の努力は在満日本人にしか捧げられなかった。川村湊が述べたように「彼は十三年にわたって満洲で「国語教育」「作文教育」の実践、「児童文学」の創作活動などに携わったが、それはもっぱら在満の日本人児童を対象にしたものであって、本来の「マンシウ ノ コドモ」である満洲人（漢民族、満洲族）に対する「日本語教育」や日本語による作文教育に関心を示した形跡は認められない¹³。

一方、川端は石森らに無視されていた満人や障がい者の日本語教育に目を向けていた。満洲を旅する際、川端は自らの意思によって「満洲でも北支でも、国民学校、女学校、盲学校、聾学校など、学校を少し見学してきた¹⁴。また、「満洲から華北への旅中、満人、漢民族の学童の作文に多少注意してみた¹⁵」のである。

次に述べるように、川端は綴方を「満人や中国人の文化の向上」の根本的な方法として捉えていた。

日本の子供は綴方の進歩をありがたいと思ひ、文章を書く幸福を知らなねばなりません。そして、満人や中国人の文化の向上には、子供の文章の改革が一つの根本とも考へられます。（「少女の友」作文欄「選者の言葉」『少女の友』昭17・1）

奥出健の言葉を借りると、川端は「満洲の何を語っても綴方に収斂してしまう状況にあ」り、「五族が文化的連携をもち文学を向上させるキーは綴方にこそあるという論理を展開する」¹⁶状態にあった。

ここで、川端の作品で唯一綴方をモチーフにした少女小説「美しい旅」を見てみよう。昭和14年7月から昭和16年4月まで川端は『少女の友』に「美しい旅」を連載した。この二年足らずの連載では「盲で、聾で、唾の幼女」を助けるストーリーが描かれた。しかし、半年を置いて昭和16年9月「美しい旅」の連載が再開され、昭和17年10月まで発表され続けており、この部分は「続美しい旅」と呼ばれている¹⁷。「続美しい旅」は前半部分に「盲聾学校」¹⁸の教師である月岡先生が渡満し、「満洲国」の「盲聾学校」を見学する紀行が書かれているのに対して、後半部分に入ると、急に帰国のフェリーで「満洲国」の子供達が書いた綴方に傾倒した心境を語りだして綴方の重要性を主張している。「続美しい旅」の後半部分は、おそらく渡満し、『満洲国の私たち』を編集した経験から得られた感慨を作品に入れたと考えられる。その中でも、月岡先生の語りから、川端の〈外地〉における綴方観を垣間見ることが出来る。

小さい子供が、「三つのちがった言葉」を、いちどきに習ふといふことは、月岡さんをおどろかせた。

一年生の二学期にもなると、もうたいていのことは、日本語で話せるといふのにも、びつくりした。

月岡さんの教へてゐる子供達は、日本人でありながら、日本の言葉を、片言のやうにしか話せない。

つんばでおして、言葉を持たない子供達に、言葉を與へようとしてゐる月岡さんは、言葉がどんなに力のあるものか、誰よりもよく知つてゐる。

13
川村湊『海を渡った日本語（新装版）——
植民地の「国語」の時間』青土社 平16

14
「満洲の本」『文学界』昭17・3

15
「序文」『満洲国の私たち』中央公論社
昭17・12

16
注6と同じ。

17
『川端康成全集』（川端康成 新潮社 昭
56）と『川端康成全作品研究事典』（羽島
徹哉・原善編集 勉誠出版 平10）では
この部分の連載は「続美しい旅」と区別さ
れている。

18
「美しい旅」の原文より引用した。この表
現を用いたのは、原文を忠実に記載するた
めであり、差別的な意図を含めているわけ
ではない。

作中に登場した綴方を書く満洲学童使節団のメンバーである。月岡先生が読んだのは綴方使節が書いた綴方作品である。

満洲国の子供達は、日本語を、自分の国の国語として、国民学校でも習つてゐる。

さうして日本語の文章の上手な少年と少女とが、綴方使節¹⁹として、日本へ来た。日本の印象を書いた。(『純美しい旅』『少女の友』 実業之日本社 昭17・6)

川端にとって、「満洲国」で展開された綴方は障がい者学校で教えている言葉と同じ次元のものであった。つまり、「言葉を持たない子供達に、言葉と與へる」ことが日本語教育の真の意義とされているのである。さらに、彼はその言語的価値の上に精神的価値を付与したのである。『満洲国の私たち』に「子供自身の言葉による、子供自身の文章の促成となるは必然で、つまり、子供の真実と幸福、子供の生命が、ここにひらかれたとも言へる」と強調している。

そして、彼の満洲体験や満洲文壇への思いを綴る随筆「満洲の本」に再び「言葉を持たない子供達に言葉と與へる」という文化向上の願望が示され、綴方が生命や幸福のための事業であると主張している。

日本の綴方の発達には日本の子供に自分の言葉を持たせたのであつたが、その言葉は今日の日本では最も純粋な口語である。中国や満洲の子供達は自分の言葉を持つて文章を書いてゐるのであらうか。私の目に触れた限りの学校の作文はほとんどことごとく、古臭い紋切り形の論文風な書き方で、日本の綴方とは何十年おくれてゐるかもしれないものだつた。満洲国の青少年生活記の募集には、さういふ死んだ文章を排し、具体の、実感の記録をもとめ、満人の青少年もその趣旨に応じて生活記を書いたといふ。果して成功してゐれば、満人の子供の言葉、そして生命が、ここにひらかれたと言つてよい、幸福な革命であらうか。(『満洲の本』『文学界』 昭17・3)

川端は満人の子供が書いた綴方の「古臭い紋切り形の論文風な書き方」を目にし、「日本の綴方とは何十年おかれてゐる」と痛感していた。そこで、その子供達を助けるために、「満洲国の青少年生活記の募集には、さういふ死んだ文章を排し、具体の、実感の記録をもとめ、満人の青少年もその趣旨に応じて生活記を書」くように努めていた。そして、この成功を「満人の子供の言葉、そして生命が、ここにひらかれたと言つてよい、幸福な革命」だと意味づけている。

無論、後進を文明化させる思想も植民地主義として非難されるが、ここで強調したいのは、戦時中の「満洲国」における日本語教育において、そのことは意図されていなかったということである。明らかに、綴方をめぐる価値観に関して、川端は拡張意識が高まる日本語の植民地進出と差異化を図っている。それは、本節で論じてきた「言葉を持たないかわいそうな子供に言葉と與へる」ことによって、最終的に生命の幸せを感じさせるという、独特な綴方価値観である。

三、綴方から見る川端の文学理想

川端の戦時中の綴方活動を見ると、帝国主義の決まり文句を多用し、植民地支配下の満洲における日本語教育に積極的に取り組んでいた。それと同時に、独特な綴方価値観をもっていた川端は、綴方に対して独特な期待も付与しており、それは帝国の欲望から乖離したものであった。その接近と乖離が両立する理由とは何か、そして、この両立が何を意味するのか。こういった問題こそ、川端の戦時中の立場を解明する鍵である。本節では川端が綴方に託した文学理想を見出すことによって、その接近と乖離をめぐる問題を解明する。

川端が綴方に託した理想を分析するには、まず川端が考えているよい綴方と悪い綴方、つまり綴方の評価基準について考察する必要がある。川端は『模範綴方全集』選者の言葉において、よい綴方についてこう語っている。

自分のわがまま勝手に童心へ写すから、生きるのである。これは綴方、また童心の世界の第一の長所である。傍若無人とも見えるこの自由暢達は、たうてい大人は及ばない。きらめく神の鏡のやうな写生は、子供のものである。(「選の言葉」『模範綴方全集』中央公論社 昭14・6)

小学生の綴方はいろいろなものの無垢な泉である。
純粹無垢のみづみづしい心にもうつつの写生は、素朴な写生文の極北であらう。(「綴方の話」『文学界』文化公論社 昭14・8)

川端は小学生の綴方を絶賛し、そのよさは「童心」によって「素直」に綴る「素朴な写生文」にあると主張している。綴方の評価基準を純粹無垢といった書き手の内面的性質と結びつけたのである。

また、子供の綴方を称賛したのに対して、少女の文章を批判的に評していた。「綴方について」には「中学生や女学生の文章が、小学生の文章と到底比べものにならぬやうに劣ることは、誰もが知つてある」と酷評し、「少女の友」作文欄「選者の言葉」には「これまでは、小学生の綴方はいいけれども、女学生の作文はだめだといふことになつてゐました。これでいいのでせうか。小学校を卒業して女学校へ入ると、急に作文が下手になるのでせう」²⁰と述べ、小学生から女学生に成長すると、却って文章が劣っていくことを指摘している。さらに、「もう一度小学児童の綴方から勉強して下さい。いい綴方を読んで反省してみてください。小学生にかへれと説くわけではありませんが、子供の素直に生きた眼は文章の根本です」²¹と少女達が子供に文章を見習うべきだと主張している。

子供を肯定して少女を否定する理由として、川端は小学校の高学年は「子供の心の成長」によって綴方の面白さが失われてしまうと考えている。彼は「乙女心は童心よりも芸術にとつて危険であり、用ひ方がむづかしい」²²と考えており、「少女の一部分は児童の文芸に居候し、他の一部分は成人の文芸に居候する。一は童話的情緒を懐かしみ、一は恋愛的情緒に憧れる」²³と少女心を批判している。

20
『少女の友』実業之日本社 昭16・1

21
『少女の友』実業之日本社 昭16・2

22
『少女と文芸』『若草』宝文館 大15・3

23
注22と同じ。

川端にとって、少女の文章が劣っていくのは童心を持たずに、「幼年期と青年期とをつなぐ少年期の心が、雲に蔽はれてゐる」²⁴ため、「素直な童心」による文章が書けなくなると考えたからであった。少女文芸が児童文芸でもありながら、大人の文芸にも跨っている中途半端な状態にあるという見解を示している。

つまり、川端は綴方の評価基準をめぐって、子供／大人、童心／乙女心、素直な心／曇っている心という二項対立を念頭に置いており、綴方の面白さが失われる原因は子供が成長していくことだとまとめている。言い換えれば、川端は綴方作者が思春期に入ると自意識を持つようになり、「感傷」的すぎるものを書くようになったと考えており、この成長を綴方創作の障害と見なしている。

そこで、もう一つの疑問が生まれる。なぜ、綴方の作者は成長してはいけないのであろうか。このことを考える際、川端にとって綴方を書く主体が児童のみならず、教師も含んでいるということを見逃してはいけない。川端は綴方の創作には不可欠な補助として教師の指導を提示した。「綴方は児童と教師との合作とも見られる」²⁵と考えていたのである。

これらの綴方は、決して子供だけの力によるものではない。最も自然に子供から生れたと見える文章はまた教師の創作とも言へるのである。（「綴方について」『文章』 東峰書房 昭17・7）

要するに、教師は子供を指導して、書かせるということである。指導によって、「最も自然に子供から生れたと見える」文章を書かせるのである。

しかし一方で、川端は教師の過剰な関与によって大人くさい綴方が生まれることに懸念を示している。東京女子大学での講演で、ひとつの例文を読んだ後、彼は作文の欠点を以下のように指摘した。

これら（綴方の描写——筆者注）を読み合わせてみますと、一教師の指導はあまりに明らかで、むしろ明らかな度が過ぎて、不自然な作為がある。（「綴方の話」『文学界』 文化公論社 昭14・8）

ここでは川端は教師によって子供らしさが壊されてはいけないと言い、教師は児童に対して、子供らしく童心的な綴方を書かせるように指導すべきだと主張している。

先に心が成長した少女の文章を否定したことと合わせて見れば、子供でいなければならない理由、そして童心や純粹無垢などの意味が見えてくる。純粹無垢というのは自意識を持たないことである。綴方を書く子供は自意識を持たずに、教えられることをすべて受け入れる空っぽの容器となる。童心という子供らしさが教師の指導によって注入され、綴方を書かされる。川端はそのような綴方を望んでいる。同じ理由で、成長して自己を意識し始める少女は否定的に見られるのである。

なぜこのような綴方を望むのか、綴方になにか夢を託しているのか、この美意識のみなもとを探る必要がある。川端は綴方が子供の教育だけではなく、大人の教育にも意義があると主張している。この意義については、以下のように述べられている。

大人が綴方によつて、人間性の誕生や発展を振りかへり、その故郷を思ふといふことも、魂洗ふ方法であらう。子供の綴方を通して、子供に学び、人間なるものを教へられるべきである。国語や文学について、前に言つたと同じやうに、人間について考へる時の素直な案内役としても綴方を軽くは見過ごせぬ。
〔「選の言葉」『模範綴方全集』 中央公論社 昭14・6〕

子供のための国語教育以外に、川端は綴方に人間性を取り戻す使命を付与した。この教育は「生命の素直で無垢な開眼を省みる」ことや、「幼い日を思い出す」こと、つまり大人が綴方を通して、「子供らしさ」を体験することである。川端にとって、幼い子供時代は人生の原点であり、そこに最も素朴かつ奥深い人間性があった。大人は子供の童心と接することによって人間について考え、生まれつきの人間性を取り戻すことで、救われるのである。この人間性教育のために、子供は子供らしくいなければならない。子供の綴方は「人間について考へる時の素直な案内役」すなわち人間性教育の教科書でなければならない。

この人間性教育の思想はけっして綴方だけにあらわれているわけではない。川端は文学の使命に対しても、同じような発想をもっていた。

「宗教時代より文芸時代へ。」この言葉は朝夕私の念頭を去らない。古き世に於いて宗教が人生及び民衆の上に占めた位置を、来るべき新しき世に於いては文芸が占めるであらう。これを信じることは我々の使命感を鼓舞し、生活感情を正しくする。（「『文芸時代』創刊の辞」『文芸時代』 大13・10）

羽鳥徹哉の言葉を借りると、「川端は『文芸時代』創刊にあたって、死の超越、人間救済のための文学という、絶大な夢を、文芸にかけた」²⁶。川端が考えている文学の使命は宗教の代わりに人間救済をすることである。そして綴方は川端が考えている文学の使命の一つの実践と言っても過言ではない。綴方は人間が生まれて老と死に赴くことに逆らわせ、精神的な若返りの経験を可能にするものであり、人間性を取り戻す案内役である。まさに「死の超越、人間救済のための文学」なのである。川端は若者の作文について、直接に童心と宗教を同列視し、その重要性を論じていた。

「捨身」と云ふことは、宗教や芸道の世界で、古来どんなに尊ばれてゐたことか。また同じやうに、「童心」と云ふものは、宗教や芸道の世界で古来どんなに尊ばれてゐたことか。宗教や芸道の痛ましい程の修行は一つにはこの童心を取戻さんがためであつたのだ。（『少女と文芸』『若草』 宝文館 大15・3）

宗教の修行による「童心」回復と作文の創作による「童心」回復は同じようなものであり、川端が魂の浄化あるいは人間性救済を綴方に託したのは明らかである。つまり、文学による人間救済は川端の一つの文学理想であり、その理想の実践例として綴方があった。

26
『作家川端の基底』教育出版センター
昭54

おわりに——踏み台としての帝国拡張、理想の実践場としての満洲

前節において川端の文学理想を明らかにした。では、川端があつた時代に、帝国日本の植民地支配に呼応して綴方活動に取り組んだのはなぜだろうか、その接近と、これまで論じたような乖離がうまれたのはなぜだろうか。

川端は、彼の文学理想である人間救済を綴方に託した。彼はその具体的な実践の場所として満洲を選び、実践の対象として現地日本人のみならず、日本語教育が遅れている満人や盲人を選び、彼ら彼女らの救済を目指したのであつた。彼にとって、満洲における綴方活動は、文学理想を実現する最高の機会と感じられたに違いない。言葉を持たない子供に綴方の素晴らしさを教え、生きる喜びを感じさせようとする彼の思いと活動は、その文学理想の源泉から湧いてきた思想の一潮流だつたと言っても過言ではない。

ただ、彼の思いと活動の基盤は、あくまでも日本の植民地支配のために行われた日本語教育政策である。である。川端は綴方に「人間救済」の夢を見、夢を実現する「実験場」として満洲があつた。彼を満洲という「実験場」に導いたのは帝国主義の植民地進出であり、綴方が植民地支配に必要とされたからこそ、綴方の重要性を謳い綴方活動に携わる彼のような知識人が必要とされたのである。そのような背景があつてはじめて、川端は彼の文学理想を背負つて満洲での綴方の活動を行うことができたわけであり、言い換えれば、その活動は、帝国主義との共犯関係を結ぶことではじめて可能となつたのである。

その共犯関係は日本の帝国建設・拡張の歴史的な文脈において理解される必要がある。アメリカの歴史学者ルイズ・ヤングは、日本の帝国主義について論じた時、総動員帝国という概念を提示した。ヤングが述べるように、「総動員帝国は、国民大衆や本国の社会を文化的・軍事的・政治的・経済的に動員する」帝国の形態である。そして、帝国拡張の過程は「全体主義的というよりも多元主義的」であり、「これらの多元的な勢力のなかで発揮された無数の個別的な主導権が、総動員帝国を準備した」²⁷のである。日本の帝国建設は、とりわけ「国民精神総動員運動」などの政策をもち、あらゆる人に様々な夢を抱かせることによって、政治、経済そして文化の各分野の人たちを動員した。川端もまた、自分の文学理想が帝国建設の需要と呼応しているところで帝国拡張に動員されたのである。本論は川端と帝国主義との共犯関係を提示し、彼と戦争との関係をより明白にただけではなく、文学者がどのように帝国建設に動員されたのか、つまり一人の文学者が戦時中の帝国主義とつながる回路も示している。戦争のまったただ中においても、川端は綴方によって自らの文学理想を守り、戦争の時代を生き抜いてきた一方で、その理想の実践に帝国主義との共犯関係が潜んでいる。川端の綴方活動もまさに、帝国主義のメカニズムに組み込まれ、その一部とされ、「総動員」の帝国主義に巻き込まれたといえよう。

27

ルイズ・ヤング『総動員帝国—満洲と戦時帝国主義の文化』岩波書店 平13